

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
隆夫	月を ほのる かげろう	光雲2 風舎	俳翁 喜夫	隆夫	荒一葉 マスミ	荒一葉 のり子 粉雪 諒明	珪子 芳春			のぞみ 月を 道を はるみ	朝香			俳翁
掌中の蝗の動き今もなほ 下五「今もなお」が効果的。	より添へる雲の白さや今日の月 雲を邪魔者にしなない心の寛容さが生み出した名句。名月だからこそ雲もまた美し、ですね。取り巻く雲の白さが月の美しさを際立たせている様子が見えるよう。	フラメンコ踊るジプシー秋の蝶 ジプシーと秋の蝶の取り合わせが素敵。やや無理にも思えるが、季語とフラメンコ、ジプシーとの取り合わせが秀逸である。蝶は黒アゲハか、妖艶な踊り手が浮かんでくる。	余命は一日八日目の蝸（せみ）しぐれ 余命一日の蟬を哀れ愛しむ詠みが切ない。あと1日燃え盛る命の叫びに聞こえます。	ショーケース磨くパン屋や秋の朝 「ショーケース磨く」と「秋の朝」の爽やかさがマッチしています。	大西日フェンス間際に捕るフライ 試合も大詰め、西日の中で大フライをキャッチした瞬間が劇的。ホームランを期待したのに、フライになってしまったのか、野手の好守でフライに仕留めたのか。臨場感が伝わる。	林檎ほおぼる少年に薄き髭 の生え出した少年の大人への脱皮を、リンゴを齧る姿に垣間見る。甘酸っぱいリンゴと少年の髭の対比がいい。大人になっていく少年、良き日々が待っていますように。少年の林檎を頬張る可愛いらしさと生えだした髭とのギャップを破調により巧みに表現している。	笑わない男の我慢猫じやらし 女にも分かります。いかつい男性と猫じやらしの取り合わせにおかしみを感じます。	行く夏や指の会話はなお続く	秋日傘ネオン寝れを隠すよに	風の盆そつと座布団うら返し 特別な日に特別でないことをしている。座布団が絶妙。座布団の裏返し先客はどなたか、とても興味をそそられる詩で、そつとが効いていますね。	紅玉をシャリリと齧り妻笑ふ 昔からある紅玉を懐かしく思い出しました。明るいう句ですね。	名月や足あと増える晴れの海	まだ青春今が青春ほうせんくわ	茶柱やぼちぼちいこか休暇果つ 縁起の良さに心晴れやかな気持ちと仕事への意気込みも感じさせる。
後記朝香	木村るみ子	反町修	光雲2	秋谷風舎	岡本たか子	ほのる	新 曆文	池田珪子	木村隆夫	新井史子	古賀由美子	石関六弦	荒一葉	檜鼻ことは

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年九月
	荒一葉 音思 美枝子 粉雪 風舎	のり子 翔太 道をはるみ 鶴城	ことは	朝香	るみ子 朝香	かげろう 京子	暦文 光雲2 修 チアキ	道を 京子	きいち	ことは 芳春 ほのる 喜夫 チアキ 鶴城	たか子 寒立馬		るみ子		
稔り田に田圃アートの浮かび来る	泣きぐづる吾子に添ひ寝の虫時雨	秋の蚊や一燈暗き外廁	空青し益々青し野分晴	蝉むくろ見上げる空の翳雲	山門の石段覆ふこぼれ萩	谷歩きV字の先の空高し	悪餓鬼のひとみ躍らす鬼やんま	欠くれればや愛し盛りの十六夜	闇に溶け闇に奏でる虫の声	霧襖開けて始発の来たりけり	濃き瑠璃の露草一輪歩を止める	盛籠の秋果痛むや吾もまた	足腰に葉いらんか案山子翁	政子ほど深き愛なし翳雲	
丸山マスマ	渋谷きいち	森美枝子	かげろう	霜里	しんい	奥山粉雪	保坂翔太	網野月を	後藤允孝	俳翁	詩子	本橋幾子	青木鶴城	望月のぞみ	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
いちい しんい 諒明 京子	珪子 六弦				ことは 正信 のぞみ きいち 寒立馬		いちい 修 諒明	修 六弦			マスミ	稀香 寒立馬		粉雪 芳春
かなかなのソプラノ満ちて茜空 カナカナの声をソプラノと表現したのがびつたり。タぐれのひぐらしの澄んだ声をソプラノとして素敵です。蝸の声を「ソプラノ満ちて」と表現した言葉の妙。また、「茜空」により季節感が更に醸し出されている。句全体が流れるように美しい。	クレヨンとお握り提げて大花野 私も一緒に行きたかった。秋の楽しさが目に浮かびます。大花野が効果的。	芒原前のめりして揺れてゐる	生きるとは夢のまた夢秋の虹	砂利を踏む音ばかりなり萩の庭	がうがうと魔物が吼ゆる野分かな 深夜の野分は、まさしく魔物の夜のごとです。真夜中の台風の大風の唸り声はまさに魔物で恐怖を感じる。がうがうという表現が新鮮です。がうがうの擬音語が猛烈台風を想像させる。3年前の風台風の恐怖がよみがえる。満月と呑む、豪胆な思いが伝わる。	秋刀魚細し「魚辰」閉店淋し	虫の音の戸口に迫る侘住ひ 戸口の前で聞こえるとの細やかな発見が他の音がないしんとした情景を伝えていく。秋の寂しさが心に沁みる。戸口に迫る虫の音の勢いとの対比で侘住いがより強調されている。	親不孝悔いつつ参る秋彼岸 作者の後悔が滲み出ている。同感です。参る度に悔いるんです。	鰯食う左手の酒すでに空	颱風来女子社員のみ帰るべし	夜学子の歳の異なる訳もまた 夜学で学ぶ人たちにはお年寄りから若者までいろんな年齢の方々がいます。事情はさまざまだが、学ぶ意欲は同じ。熱いものがある。	ぐいと呑む腹の底から良夜かな 満月を見上げグイと酒を飲む、酒飲みの実感と至福の時間が描かれている。	曼珠沙華白き一輪別れの夕	新任の教師の赴任黍嵐 季語の幹旋が良いと思えました。度途中の赴任、学校現場の大変さが季語から伺えます。
石関六弦	木村隆夫	新井史子	古賀由美子	山中いちい	日高道を	岡田芳春	宮崎チアキ	高木諒明	寒立馬	染谷正信	小林京子	持永喜夫	河野はるみ	立野音思

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年九月
いちい 音思 正信 桂子 かげろう たか子 チアキ	六弦 喜夫			暦文			のぞみ 翔太 きいち				由美子	暦文 のり子	美枝子	俳翁 由美子 しんい 稀香 マスミ 翔太 風舎 ほのる 鶴城	
新しい補聴器の音は新しい音なのでしようね。補聴器を新調したら一段と音が聞こえる、虫の声もはつきり聞こえる、嬉しいことですね。秋の山の澄んだ空気の透明感が出ています。やつと聞こえた嬉しさ。この年齢ならなければわからない。補聴器を新調し、虫の声で秋を感じられる喜びが伝わる。虫の声を聞いて秋を満喫している顔が目に浮かぶ。作者の喜びが伝わって来て、私まで嬉しくなりました。	二つ来て五つとなりて秋燕 元気に成長した燕たちの様子が伝わります。元気に帰って欲しい。燕到来にて家繁栄です。	秋空の太陽の塔ひとりぼち	新米のつやつやとして膳豊か	初恋はすでに過去なり蚯蚓鳴く 初恋は幾つになっても忘れないもの。	鳥にも斧を振り上げいぼむしり	秋寒の風吹きわたる奥の宮	少年のポケットに蝉鳴いてをり 子どもの頃、ポケットに蝉を入れたことがあります。蝉の寿命を考えたらポケットでも鳴かせてやりたいです。	秋涼し沼面を渡る詩吟かな	啼き声を零して湖へ雁渡る	秋刀魚焼く旬と言へども冷凍魚	指を折り下五字余り葡萄食ふ なかなかうまくいきませんよ。考えてもまとまらない。サテ、葡萄でも食べましょうか。	三日月の座り心地を試したし こんな事考えた遙か昔、メルヘンの世界。映画のワンシーンが浮かぶ。	行きつけは臨時休業秋湿り コロナ下で休む店が増えました。	庭の木はみな自由席小鳥来る 庭に来ている小鳥の動きの奔放さを「自由席」と詠まれたのが季語にマツチしている。明るい庭です。絵本のよう。しばし憂さも忘れて小鳥たちが時を過ごしたい。自由席がいいですね。爽やかな句です。小鳥が来ることを心から喜んでいいます。庭の木はみな「自由席」が良い。作者の小鳥を迎える温かく、豊かな心が伝わる。中七の「みな自由席」がとにも良い。庭の木は「みな自由席」の表現が優れる。中七の多い、広い庭に取り囲まれている作者が、うらやましく思われる。中七の措辞が広い庭。「みな自由席」の措辞が素晴らしい。	
新調の補聴器拾ふ虫の声	青木鶴城	本橋幾子	後記朝香	望月のぞみ	反町修	木村るみ子	岡本たか子	秋谷風舎	光雲2	池田珪子	新暦文	ほのる	檜鼻ことは	荒一葉	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年九月
はるみ	月を	しんい	美枝子	音思 たか子	由美子 稀香		正信	隆夫						光雲2	
長き夜やくたびれておりお互ひに くすつと笑つて良いのやら、ドキッと感ずるものなのか、 大好きです。	秋晴の追越し車線しか見ない 走り屋ですかね。	縁側や昭和の日々の月見席 都会では見かけることも少なくなった縁側、懐かしく思い出されまし た。	ぽつと咲き待つふり見せて月見草 中七がいいですね！	流れ落つ滝のごとくに寺の萩 萩が元氣良くあちらこちらに枝を伸ばして咲いている様子が目に浮かび ます。枝垂れている萩を滝に喩えたのが素晴らしい。	秋の夜や俳句工房息づきぬ 俳句工房いいですね！私はバスの中が俳句工房になります。うまくまと まりませんが楽しいひと時です。俳句工房とは何か、息づくの表現から 秋の夜に触発された作者自身の作句意欲のように感じる。	コンサート中止のメール雨月の夜 かげろう	秋袷手揉みたやさぬ太物屋 商売熱心な太物屋がよく出ている。	雨露さはに宿す萩叢暮れ残る 濡れた萩の群生が丁寧に描かれています。	交差点ゆるりと渡れ秋の風 霜里	大利根の朝日に光る鯿飛び 保坂翔太	秋初め「やつとここまで」年の夏 奥山粉雪	秋澄むや山は訝か山彦か 後藤允孝	秋の海ヒトフタシキの魚放つ 網野月を	浮御堂夕映えの波雁渡る 夕映えの波と雁渡るが響きあっている。 詩子	
持永喜夫	小林京子	立野音思	河野はるみ	渋谷きいち	丸山マスミ		森美枝子	しんい							

(6)

								82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評）	令和四年九月
									るみ子							
								野分だつ何やら心ざわつけり	今日もまた台風一過日の暮れる <small>台風で家籠り。災害も増えてますね。</small>	かはゆくも憎さの勝る稲雀	リモートで友と語らふ夜長かな	名告り合ふけふの旅友秋うらら	かつて御国に蒙古襲来野分波	片蔭や土塁の果てで途切れたる		
								岡田芳春	山中いちい	日高道を	高木諒明	宮崎チアキ	染谷正信	寒立馬		